
或る物語

柚木

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る物語

【Nコード】

N8533P

【作者名】

柚木

【あらすじ】

「…ダリア、お前のお役目は王妃の身代わりだ。どうか国のために死んでくれ」

帝国の由緒ある貴族・ドーラ家の一人娘ダリア「ディ」ドーラは、たった一人の主に全てを捧げた。

年頃の娘の幸せも優雅な貴族生活も何もかも捨てた。

全ては至高の存在の為に。

……名を。誰かに、名前を呼ばれた気がした。

寝台と丸テーブルが一つだけある簡素な部屋。寝台ではなく床に座り込んでいた少女がゆっくりと目を開けた。そこから現れたのは深淵を湛えた、どこまでも深い青。

二度三度とまばたきを繰り返してから少女は立ち上がる。まだ幼さの抜けきらない顔と、年齢にそぐわない落ち着きのある眼差しと雰囲気。それらのアンバランスさは絶妙な均衡で少女の中に存在していた。

軽く頭を振ってから着替え、背を流れる墨色の髪を一つに束ねた。装具もほとんど無意識に身につける。窓に映る己を念入りに眺めて崩れているところはないか確認する。この部屋に鏡はなかった。

そうして身支度を終わると、少女は正面にある扉ではなく寝台の横にある隠し扉に身を滑り込ませた。厚い扉の向こうは完全な暗闇だったが、少女が臆する様子はなかった。

扉を慎重に閉めて、少女は部屋から出ていく。扉は最後に少しだけ金具の音を立てた。その音だけが、少女が目覚ましてから部屋を出るまでの間で唯一、部屋に響いた音だった。

暗闇の中、速度を全く落とさず向かった先は大理石の広間だった。冷え冷えとした空間を統べるように空の王座が鎮座している。少女は自分の定位置まで進んで直立の体勢をとる。

しばらくすると鈴が擦れ合うような音を少女の耳は拾った。小太

刀を前に置いてすぐさま膝を付き、頭を垂れて右腕を額の高さまで持ってくる。左腕は立てた膝に添えた。剣を持つ者としては最上位の敬礼である。

そして物々しい音とともに広間の両開きの扉が開いた。大理石の上を歩く音が静寂な広間の空間を破った。音が止み、その内の一つが王座に座る。

「さて……とうとうこの時が来たわけだが、」

「顔を上げりや」

語り出した低い声を遮るように凜とした声が少女に投げ掛けられた。場は一時、先ほどの静寂を取り戻す。

少女は右腕を下ろし、顔を声の主へと向けた。声の主は美しい女性だった。少女の凪いだ海を湛える青と、それを見下ろす翡翠がぶつかる。

「ふむ、なるほどな。確かによう出来とるわ。この国の技術者は優秀じゃの」

まるで物に対する評価に、少女は全く動じなかった。同じくその場にいる他の人間も、誰一人として眉をひそめることもしなかった。代わりに王座に座る男が口を開く。

「……あとで科学局に伝えよう、彼らも喜ぶ」

「しかしこの瞳は、我が姫に比べてちと暗いな。あの子はもっと綺麗な空色をしておる」

「光の中で見なければそう分らん。第一そんな間近で見られることなどない」

まだ何か気にくわなそうな様子の女性を素っ気なく切り捨て、男は少女に顔を向ける。

「お前は私たちを恨んでも致し方ないというに……長い間よく励んでくれた」

どこか感慨深げに呟く男だが、その後ろに立つ男の面影を宿す少年は対照的だった。憎々しげに片頬を歪めて口を開く。

「これからがお役目の時だ。お前は優秀だと聞いた。その能力、十

二分に発揮して役目を果たせ」

その言葉に少女はただ、流れる動作で頭を下げる。

彼女自身の特徴的な、凧いだ海を思わせる瞳と同じくその心に揺れも迷いもなかった。

「殿下の御心のままに」

春の初め。雪も溶けきっていない、ある朝の出来事である。

莊嚴な鐘が帝国に鳴り渡る。

オステイマ帝国。世界の三分の一を掌握し、残りのうち半分とは実質支配関係と言える同盟条約を結ぶ地上の支配者。

たった一代で帝国の力をここまで広げたのは当代国王ハティクⅡジスⅡオステイマ。若くして王位に就き、その若さと苛烈さを以て戦場を自ら駆けた獅子王は、その伝説の最後を飾るに相応しいことを成した。

どれだけ文献を漁ろうとも、たとえ属国以外の国の文献を見ようとも、彼の成し遂げたそれは偉業と称えられている。

彼について語るならばその偉業なくして語れない。そしてその偉業を語りたくば事の始まりから知らねばならない。歴史に埋もれた事実を、誰も結末を知らないその始まりを。

彼が偉業を果たす十年前、一人の少女が父親に連れられて城に足を踏み入れた。少女は幼くとも美しい顔立ちであったが、何よりもその瞳が印象的であった。深い青を宿すその瞳は、凪いだ海を相手に思い起こさせた。

少女の名はダリア。ダリアⅡディードラ。帝国貴族ドーラ家の一人娘である。先日6度目の誕生日を迎えたばかりの娘だった。

ドーラ家は代々教皇に仕える一族だった。政と信仰が切り離されたと今であっても教皇の権威は一点のくもりもなく、教皇の厚い信頼を受けるドーラ家は指折りの貴族だった。

王宮の中とは思えないほど狭い部屋にダリアは通された。けれど部屋に掛けられた王家の紋章が織られたタペストリーや複雑な彫りが施されているオーク材の調度品など、どれも最高級のものだと見れば分かる。

ダリアは初めての登城とあって心を踊らせた。実家でも贅と職人の技巧が詰め込まれた一級品に囲まれて過ごしていたが、王宮はそれに勝る素晴らしいところだった。昔に途絶えた建築様式の城も、柱を埋め尽くす彫刻も、美しく整えられた薔薇園も。全てが少女を夢中にさせるに足る魅力を備えていた。

だが、ダリアは痛くなるほど手を握り必死に自制した。今日は朝から険しい表情をし、自分を一度も見ない父を横目に見上げる。やはりこちらには一瞥もくれない。

国王と謁見することしか知らされていなかったが、幼心にただならぬ空気を察したダリアは子どもとしての自分を殺し、ドーラ家の一人娘として立っていた。

……ダリア。

部屋に入ってから30分。少し待ちくたびれてぼんやりしていたダリアは自分の名前にすぐ反応出来なかった。

「……ダリア」

「あ、ごめんなさいお父様。ちょっとぼーっとし」

「お前さえ望むならここから逃がしてやる事が出来る」

父は静かに、けれど焦燥を滲ませる口調で告げた。少女はやや物騒な言い回しに首を傾げた。一体何から逃げるのだらう。

「お父様？」

「あの御方を裏切るのは……しかしお前さえ望むなら、私は……」
いつだって意志を貫く顔立ちをしてダリアの前に立っていた父は、迷いのある表情で言い淀む。

何を、と問おうとしたダリアは遠くから聞こえてきた音にびくり

と反応する。ダリアは耳がよかった。音は回廊を外れた狭い通路を進んでくる。この部屋に向かっていているのは明らかだった。

「お父様、誰かがこつちに」

ダリアが教えてやると、父は一瞬顔を強張らせるが、次にはいつもの父に戻っていた。先ほどまでの迷いもその顔には見当たらない。父は膝について、少女にも促す。

言われたとおりダリアが膝をつくの、扉が叩かれるのはほぼ同時だった。扉は返事を待たずに開かれた。

父は頭を下げていたが、好奇心に負けたダリアは礼を忘れて入ってきた人物を見てしまった。そして寸でるところで驚きの声を飲み込む。父よりも少し若い男性と、彼によく似た少年……国王陛下と王太子殿下だ。やって来たのはその二方とダリアの教育係の神官一人。そしてあるうことか現教皇だった。

無礼を承知で、でもダリアは頭を下げる事が出来なかった。自分を見る王太子の鋭い視線から逸らせなかった。

「ダリア……陛下と教皇様の御前ですよ」

神官に静かにたしなめられ、慌てて礼の形をとった。そんな少女を眺めてから神官は国王に非礼を詫びた。

「いや、いい。息子が殺気を投げていたのが悪い。ドーラの娘、お前もそう恐縮するな」

それから顔を挙げるように言われて、父とダリアは直立の体勢に戻る。

何故、国王と教皇が揃って自分を召喚したのか。この国では王家と教皇庁の力関係は複雑だった。その二方が並ぶこと自体が異例と言える。しかし、理由はすぐに分かった。教皇が重く口を開く。

「ダリア。まだ幼い貴女には少々酷だと思いますが、貴女のお役目が決まりました」

ドーラ家を始め、王家ではなく教皇庁側に忠誠を捧げる家の者に

は”お役目”が課される。それは次期教皇の世話役から、それこそ裏の仕事まで多岐にわたる。

ダリアも物心つくころにはお役目について言い聞かされていた。お役目を果たすこと。それが自分にとって全てであり、何よりの誉れなのだと信じて疑わなかった。

少女にとってまだ善悪の区別すらつかない時から刷り込まれた考えは、世界の摂理よりもずっと当たり前のことだった。

だからお役目と言われたとき、少女の中では戸惑いより喜びの方が大きかった。こんなにも早く果たすべきことが与えられるとは、夢にも思わないことだった。

ダリアは両膝をついて覚えたばかりの印を手で切る。それはお役目を課されるときに儀式だった。父は、いつの間にか部屋の隅に下がっていた。

教皇が一步前に出て、ダリアの額に手をかざす。耳鳴りがするほど空気が緊張した。

「ダリア♡ディ♡ドーラ。ここにアウスレーゼ♡ジス♡オステイマ殿下の王妃の影を命じます。貴女に神々の祝福あらんことを」

教皇が正式な祝詞　常人には聞き取れない音の羅列　を唱え、元の位置に戻る。少女は目を開けた。言われた意味を正確に理解出来なかった。

呆けている少女の肩を父である男が掴む。言い含めるように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「…ダリア、お前のお役目は王妃の身代わりだ。どうか国のために死んでくれ」

実の父親からの宣告も、遠い出来事に思えた。少しずつ染み渡る

ように言葉は入ってくるが、未だ呆けたままの少女は諸の言葉を返していなかった。

しかし次に聞こえた言葉で全ては終わった。

今まで一言も発しなかった王太子が少女の前に出る。金砂の髪から覗く鷹の目。少女と2つしか変わらない少年は、絶対的な王者の眼差しで少女を見やり口を開く。

「ダリア。お前は私の姫に代わって死ねるな」

それが、彼女が全てを懸けて尽くす唯一の主から賜った最初の命令だった。

……そして彼女がダリアと呼ばれる最後となった。

静かに、まるでその瞳に導かれるように、ダリアの心は定まる。

「……ダリア＝ディードラ、そのお役目有り難く頂戴いたします」

その時その瞬間、ダリアはダリアではなくなり、ただの影となった。

名前を捨て、戸籍を捨て、顔を変えた。あらゆる毒の名前、武術、暗殺術を乾いた土が水を吸い上げるように会得していった。同時に指先の動き一つまで、今は遠い国で暮らす姫の動きを仕込まれる。

時は流れ、花は芽吹き、雲は切れ、運命はその歯車を組み合わせる。

その年は歴史的な年となるだろう。

かの帝国オステイマと、”聖都”ミュレイヒエの婚姻。オステイマよりは、鷹の王子が。ミュレイヒエよりは、歴代随一の巫女姫が。

その婚姻は歴史的な婚姻となるだろう。

潜む謀略も、婚姻の裏で死んでいった一人の少女も歴史が明かすことはなく。

その物語は歴史的な物語となり語り継がれるだろう。 もうひと

つの、誰も知らない物語を文字列の中に潜ませて。

荘厳な鐘の音が帝国に鳴り渡る。

帝国は、まもなく19になるアウスレーゼ殿下の結婚話に浮き足立っていた。

雪は峻嶺に残すだけの、暖かな春の陽気に包まれた帝都は賑やかだった。あちこちに露店が並び、活気に満ちた人々の声が飛び交う。

冬明けを待たずして全世界に発表されたオステイマとミュレイヒエの結婚。それは当事国のみならず世界中に衝撃を与えた。

帝国オステイマと言えば、今では圧倒的な権威を誇る大国である。その影響力は計り知れない。しかし、人々が注目したのは帝国だからではなかった。

聖都ミュレイヒエ。巫女神信仰の総本山である。

この世界に宗教は数多くあれど、巫女神信仰は全世界共通のものだった。数ある他宗教の全ても、元を辿ればこの信仰の解釈が枝分かれしただけの話だった。

この世界が混沌に沈んでいた頃、一人の女性が地に降り立ち今の世界を形成したという。その女性は強大な霊力と、神々に特別に愛でられて造られた美貌の持ち主だった。彼女は神から遣わされた地上の女神であり、土の民、つまりこの世界で生きる人間全ての始祖と記されている。そして彼女が最初に降り立ち、眠りについた地がミュレイヒエである。今もなお彼女の力は彼の国で息づき、絶対的な神聖を保ち続ける。

これだけならば科学が発展し、魔法も不可思議な存在も夢物語となった現代では一つの信仰で終わっただろう。しかしミュレイヒエには、女神の存在を裏付けるような事実があった。

ミュレイヒエを統べる一族は女神の直系とされているが、数世代に一人は手の甲に紋様を宿して産まれる女兒がいた。そして何かし

らの超常現象……主には癒しの能力だが……を引き起こす力があつた。

彼女たちは女神の生まれ変わりとわれ、巫女姫として崇められた。

そして歴代随一と噂されるのが当代巫女姫、ロゼツタ・ラクアイアである。

その巫女姫が結婚、しかも他国に嫁ぐなど考えられないことだった。巫女姫は存在そのものが神聖。不可侵の領域を侵すことは暗黙の了解のうちに禁忌とされてきた。

だからこそ、今回の結婚は重大な意味を持つ。この結婚によって帝国が得る力の大きさに危機感を抱いた者もいよう。しかし大半の者は神々の逆鱗に触れるのではと危惧した。それだけ巫女神信仰は絶対的だった。一部の熱狂的な信者は神への冒瀆と言って憚らなかつた。わざわざ山を越えて帝国にまで直訴しに来た輩もいるぐらいだった。

もちろん帝国の民衆も不安を覚えたが、それよりも巫女姫が自国に来ることを単純に喜んだ。

このように、良くも悪くも二国の結婚は大きな反響を呼んだ。

帝都が活気づいているころ、城では巫女姫を迎える準備で大騒ぎだった。いよいよ当日になった今日は特に城全体がそわそわとしていた。

お披露目は三日後。さらにその後一週間はミュレイヒエ側の段取りとやらを踏み、二日後に正式な誓いの儀を執り行う。その前に帝

国の暮らしに慣れてもらう意味で、入国が今日となった。到着は昼過ぎのことだった。

城が昼に訪れる巫女姫の為に奔走している時、影は近衛隊長と共に謁見の間にいた。国王と王太子、そして四人の神官を従えたミュレイヒエの女王と、昼に到着とされている巫女姫本人が上座に座っていた。

「何とか無事に入国は出来たな。気付かれた様子はないな？」

「はい、疑いを持った様子はありません。」彼ら”にも目立った動きはなく、気付かれてはいないかと」

「そうか、まずは上々だな。あとは入国のパレードか。……最初の任務だな」

近衛隊長と国王のやり取りの後、最後に国王が投げ掛けたのは影に対しての言葉だった。影はゆつくりとまばたきだけをして返事をした。不敬にもなりうる素っ気なさに国王は鷹揚に笑う。その影も、次に投げ掛けられた言葉にはすぐさま最上の礼をとった。

「お前は巫女姫の名を借りるのだ。くれぐれも失態を犯すな」

王太子の、主の命令をしっかりと胸に刻み付ける。

そして一瞬だけ巫女姫の方に顔を向ける。二人の顔は瓜二つで、ただ青い瞳の彩度だけが異なっていた。凪いだ海を思わす深い青の瞳が、不安げに揺れる晴れた空色の瞳に対して安心させるように少しだけ細められる。

「はい、全ては滞りなく」

そしてもう一度礼をしてから、影は静かにその場を退出した。

広々とした廊下に一人分の足音が響く。近衛隊長の男は周囲に視線を飛ばすが、人っ子一人見当たらない。けれど影と呼ばれる先ほどの者がいるのは分かっていた。自分ですら聞き取りにくいほど声を潜める。

「……今日動くとしたら一般の信者くらいだろう。過激派で知られる南の民が大勢入国している」

”彼ら”の情報は掴めてないが、事を成し遂げたいなら今日は見送っても問題ない……むしろ効果的に事を成すなら誓いの儀と踏んでいた。

「しかし、だからこそ気を付ける。暴徒と言えども一般信者を傷つけては心証が悪い」

そこまで言って、耳をすます。相変わらず物音一つ聞こえない。そのうち人々が行き交う回廊に出た。時間も迫っているし、影は任務場所に向かっただろう。

「巫女姫様の影か……気味が悪い」

最後に独りごちて、自らも任務に向かった。

入国パレードは盛大に行われた。巫女姫をこの目で見ようと通りには人が押し寄せけが人も出たが、国が危惧するような事件は起きなかった。巫女姫は御簾越しにしか見れなかったが、まさしく女神の如く美しい方だったと酒場で人々は盛り上がった。初日は至って平和なものだった。……表向きは。

「手練れのナイフ使いか、山向こうでは投げナイフを得意とする部族がいなかったか」

「しかしあの地域はこの手の毒を調合できる材料がない」

「やはり”彼ら”が動いたのか？」

「警告のつもりでしょう。ナイフに塗られた毒も大したものでは」

城の地下にある大部屋では黒装束の集団が静かに話し合っていた。目の下ぎりぎりまで黒で覆われた彼らの顔は判別できない。

その中で、影はひたすら沈黙を貫いていた。中央の台に乘せられたナイフを何の感慨も見当たらないう瞳で見つめる。

パレードの最中、一時だけ花火が上がった。花火は火薬。つまり武力。争いが絶えないこの時分には金銀よりも貴重なもので、どんなに豊かな国でも花火は珍しかった。そして民衆が空に目を奪われたその瞬間、二本の投げナイフが警護と御簾をすり抜けて巫女姫を乗せる御輿の中に襲いかかった。

しかし中に乗るのは巫女姫の影であつたし、その周囲には帝国が誇る精鋭部隊　通称『鴉』が控えていた。誰にも被害はなく、犯人はすぐに捕まった。唯一の失態と言えば、問い詰める前に犯人を死なせてしまったことである。犯人は鴉に追い詰められるや否やあつさり自害してしまった。

「何の情報も引き出せなかったのは痛手でしたね」

「それが信者の厄介なところだ。一般人だろうと巫女姫様のためなら簡単に死んでくれる」

「”彼ら”と断定するには材料が欠けるな」

「”彼ら”だろうと一般信者だろうと……」

「もういいだろう」

それまで黙っていた影が議論に終止符を打つ。

「どのみち決定的な動きがあるのは誓いの儀。それまで姫様を守り、より正確な情報を集める。それだけだ」

では、私は護衛に戻る。そう言つて影は部屋から消えていった。鴉たちも音もなく闇に紛れていく。後にはただ、二対のナイフが残された。

東の空が白く色づいていく。巫女姫入国の翌朝、幾分か冷え込む空気は帝都全体を薄く包む霧を生み出していた。その霧を引き裂くように街を駆ける三つの影。ひたすら逃げる二つを深海を宿す黒い追撃者は鋭く追い詰めていく。

距離をある一定にまで詰めた瞬間、すかさず仕込み針を飛ばす。前を走る二つのうち一つは崩れ落ちるが、片方は次の建物に跳び移った。しかし影は狼狽えることなくもう一度腕を振るう。一步二歩と足を進めた後、逃亡者はその場に伏した。指一本動かすどころか呼吸すらままならない強力な痺れ薬に苦しむそれを眺め、胸から呼び笛を取り出す。特殊な訓練を積んだ者にしか聞こえないその音に、霧の中から姿を現したのは鴉の二人組だった。確認するように一人が頷き、それぞれ地に倒れる逃亡者を気絶させてから肩に担いで再び霧の中に飛び込む。影も息一つ乱さず己を待つ主の元へ向かった。

「姫様の部屋に入り込んだ賊は捕らえました。後のことは鴉が」

最低限の、それでいて最高級の調度品が置かれた一室、王太子殿下の自室で影は膝をついていた。

日も昇りきらない早朝だというのに隙一つない装いで報告を聞いていた王太子は、腕を組んで影を見下ろしていた。完璧な無表情で、ただその鷹の目だけが冷たい怒りに燃えていた。

「それで」

低く平淡な問いかけに、影は気付かれないように奥歯を噛み締めた。分かっている。たとえ二人を捕らえたところで己のしでかしたことは変わらない。

「お前は私の姫の部屋に侵入を許したのだな。新しい環境で不安に怯える姫に、お前は迫る危険と恐怖を現実突きつけた、と？」

弁明を許さない追及に影は頭を下げるしか出来なかった。そもそも弁明する余地などない。

「……申し訳ございません」

「謝れば済む問題か。舌の根も乾かぬうちに失態を犯すとは。父上に誉められて付け上がったか？お前の主は誰だ」

「アウスレーゼ殿下です」

問いかけに影は間髪入れず返した。項垂れる顔を上げて主に向けた。睥睨するような眼差しをくれる鷹の目を、深海の青が挑むように見つめ返す。

「……ならば、私の名に恥じない働きをしてみせろ。今は姫の元へ行って支えとなれ。それも含めて影の役目だろう」

影は一度も表情を変えず、静かに言葉を聞き入れていた。そしていつものように音もなくその場を辞した。

巫女姫の部屋に向かう最中、影は己にあらんかぎりの呪詛を吐く。先ほどのやり取りが脳裏に浮かび、目の前が暗くなっていくような気持ちだった。主の期待に、自分は応えられなかったのだ……

自責の念よりも純粹な嫌悪感が内側を苛む。表層に出すほど愚かではなかったが、瞳の青はほとんど彩度を無くしていった。

目的の部屋の前まで辿り着き、一度深呼吸をする。帝都を駆け巡っても乱れなかった息は、少しだけ荒くなっていた。控え目にノックをし、鴉での識別番号を口にする。出迎えた鴉と入れ替わって部屋に入った。

部屋で待っていた姫の表情は、元より白かった顔から更に血の気を無くして真っ青だった。目の前に置かれた、気持ちを落ち着かせるスイートオレンジの紅茶に口をつけた様子もない。それを見て、ようやく影は彼女に対して罪の意識を持った。

何たることか。自分が失態を犯したとばかりに目を向け、それまで一度もこの姫を案じなかった。守るべき、この世で最も神聖な御方よりも自分の気持ち優先していたのだ。瞳から、一段と彩度が失われた。

姫が自分を認めて立ち上がるうとするより前にその場に平伏し詫びた。僅かな衣擦れの音から姫の動きを把握していたが、影は平伏したまま待った。……無視されても、夜までこの体勢でも、受け入れるつもりだった。

そつと姫は影の前に膝をつく。ほっそりとした指が影の顔に触れた。影は身動き一つしない。

「……顔を。顔を挙げてください」

鈴を転がすような軽やかな声が耳朵を打つ。近距離で同じ顔が互いに向き合った。二つの直視するのも憚れるほど神々しい美貌。

けれど、全く違う。

影はそう思った。自身を映す、恐怖を滲ませながらも慈愛に満ちた蒼天が輝く。その美しさは、どんな穢れも寄せ付けないほど眩しかった。紛い物。初めて猥下に会った日、耳許で囁かれた言葉が蘇る。本当、なんて美しい御方だろう。影と呼ばれる自分はなんと身の程知らずなことか。

「……けがをしていますね」

白い指が床についた手の甲をなぞる。何てことはない。賊を追っている最中、木の枝で軽く切っただけだ。お披露目の当日までにこまかせる程度には治る。

影は顔にだけは決してけがを負わないよう教育されてきたが、他の場所なら日常茶飯事だった。

「いいえ、大したことは。姫の代わりを勤めるのに支障はありません」

安心させようとそう告げたのに、姫は痛ましげに眉を寄せた。影は理解出来なかった。本当に問題ないと言葉を重ねる。けれど姫は一層顔を歪ませた。

「……………ごめんなさい」

小さな口から零れた謝罪は泣き声に近かった。突然のことに、影は表情こそ完璧なポーカrfフェイスを保っていたが珍しく狼狽した。本当に訳が分からなかった。そして次の瞬間、今度こそ影は驚きに目を見張る。

姫の手が傷口に翳されたかと思うとその部分が熱を帯び、瞬きの間に傷が完治していた。痕も全くない。

女神の生まれ変わり、奇跡の御力 ……

言葉が出なかった。話には聞いていたが実際に目の当たりにするのでは事情が違う。お礼の言葉を忘れて影は己の手をまじまじと見つめる。

どうして姫は自分などに……………驚愕と困惑を処理しきれない影を、姫の細い腕が包み込んだ。清廉なフリージアの香りに、影は抱き締められていると知る。

「本当に、ごめんなさい。わたくし、わたくしのせいで、貴女は…

……………

久しぶりに触れる人の温もりはひどく懐かしかった。胸が熱くなる。何故だろう。情など、もう思い出せないほど遠い昔に捨てたはずなのに。

あの日自分は教皇ではなく王太子を主と定め、鷹の人に全てを捧げた。かつての信仰心などもう残っていない。巫女姫だって、王太子から命じられたお役目だから守るに過ぎなかった。

……………それでも。今はただ、この優しすぎる姫に笑っていてほしいと、心から思った。

陽の光が部屋に入り込み始め城内も帝都も活気づいていく中、その部屋だけは穏やかな静寂に満たされていた。

影は護衛の傍ら、姫が望むように姫の話に耳を傾け、姫の隣に留まった。影として度を越した行いではあったが、姫の支えになれという主の言葉を思い出した。

ことあるごとに柔らかく微笑みかけられる。姫は影に対しても惜しみなくその美しい微笑みをくれるし、けがをした者を見れば躊躇いなく奇跡の力を使う。女神の生まれ変わりというのは伊達ではない。

影は姫の笑顔に陰りが薄れていくこと自体は嬉しかったが、自身に向けられる暖かさを居心地悪く感じた。姫の周囲は眩しくて清らかで、息苦しくなる。

城が寝静まった深夜、影は自室で武具の整備をしていた。髪をそろして顔を覆う布を外した姿は巫女姫そのものであった。

愛用する小太刀、毒を塗った仕込み針、身体中に仕込む何本ものナイフ、布術用の布……不備はないか、数は揃っているか。機械的に作業を進める。

ある時、影の手が止まる。先ほどから薔薇園の方角で音が聞こえてくる。風かと思ったが、それにしてはやけに方向性がある気がした。

気のせいだろうか？影の超人的な聴力でも、さすがにこの部屋から薔薇園は遠い。

しかし考えたのはほんの一瞬で、すぐに黒装束を身に纏う。整備中の武具を最低限備えて薔薇園に向かった。

人のいない夜の薔薇園は、静謐な雰囲気を漂わせていた。だが。

いるな……

気配がするだけ……五人。それと微かに聞こえる不自然な音も合わせて考えると多くて七人。城に忍び込むにはいささが多い。目的を見極めるためにもしばらく見張っていたかったが、うち二人が姫の部屋に向かっていたのでそうもいかなかった。

まずは姫の部屋に向かう二人。痺れ薬を塗り込んだ仕込み針を飛ばす。近くの一人もすぐに黙らせた。そのまま薔薇園を音もなく駆けるが、影は突如足を止める。

……後方に二人、左手に一人と右前方に一人。

視線も動かさず状況を把握する。気づかれたのが早すぎる。特に落ち度はないつもりだったのだが。

「鴉と言っても大したことないと思ってましたが、なかなかどうして鋭いのがいたものですね」

一人の青年が影の前に姿を見せて朗らかに笑った。

影は表情こそ無のままだったが、最高ラインまで警戒心を高める声をかけられるまで全く察知できなかった。

アノニマス。そこに居ない者。”彼ら”……巫女姫親衛隊の中で最も危険人物。

情報を頭の中から引つ張り出す。影はこれが好機か否か判断しかねた。いつでも応戦できる状態で目の前の青年を注視する。一方青年は場に似つかわしくない透明な笑みを浮かべた。

「任務に忠実なところ申し訳ないですが、今日は騒ぎを起こしたくないのです。」

見逃してもらえますね？

有無を言わせない笑みに、影は何も言わず腕を振るった。次瞬青年の頬に一本の赤い線が走る。それが示すものは、拒絶。唯一覗かせる凧いだ海の瞳を見つめて、青年は楽しそうに口の端を持ち上げた。

「……いいでしょう、今日は退きます。双方にとって重要なのは誓

いの儀ですしね」

あつさりと計画の一部を明かす。まるで止められるなら止めてみると言わんばかりの口振り。そんな挑発を無視して、影は一言だけ言葉を発した。

「……浅はかな」

その言葉が終わると同時に、左手に潜んでいる男が倒れた。全員がそれを認識するよりも前に鴉たちが音もなく降り立つ。

弾かれるように残りの男たちが散っていく。それを追う鴉。青年も肩を竦めてから地を蹴った。別の鴉が追跡するのを確認して、影は姫の部屋に走る。

しかし姫の部屋には先客がいた。

「殿下」

小さく呼び掛けると、穏やかに眠る姫の傍らに座る王太子が顔を上げた。

「お前か……」

囁く声に影は部屋を出ようとした。この部屋を護衛していた鴉がないということは、王太子が人払いしたのだろう。けれど王太子は手でその場にいるよう指示する。影は部屋の角に身を置いた。

「招かれざる客がいたようだな」

一人言に近い呟き。影はこれまでの経験から黙って聞いていた。そつと王太子が姫の顔にかかった髪をのけてやる。

「目障りな。姫の顔色もだいぶ良くなったが、まだその心労は量り知れない。無粋な客には早々に退場願いたいものだな」

姫の艶やかな墨色の髪が指に絡められてはすり抜けて落ちる。影は主の要求を汲んで目を伏せた。お役目を全うしなくてはならないのに、今の己のなんて未熟極まりないことが。

「もう遅い。報告は朝改めて聞く」

王太子はゆっくり立ち上がり、眠る姫の顔を見つめてから足早に扉に向かう。影の方には視線すら寄越さないで扉を開けた。王太子は扉を閉める前に一度だけ視線を影に向けたが、頭を下げる影は気づかなかった。

翌朝、影たちは再び地下に集まった。あの後逃げた三人は鴉によつて捕まったが、その中に例の青年はいなかった。そして予想外の事が起こった。

「昨夜捕らえた者たちですが、殺されました」
瞬時、空気が緊張する。

捕らえた者たちを容れた牢の見張りを近衛に、鴉は牢獄塔の周囲を見回っていた。そして朝になってみれば、昏倒した見張り番と首をかつ切られた死体が発見された。これには鴉たちも平静を保つのが難しかった。パレード、巫女姫の居室への侵入、そして今回の殺害……苛立たしい思いを否定できない。影も眉を寄せる。

結局、収穫は”彼ら”の計画が誓いの儀で実行されることの確信と、尋問して聞き出した「藤花の段」という単語のみ。影は膝どころか両手をついてしまいたい気持ちを抱えながら主に報告を済ませた。

「……そうか、ご苦労だった」

何の色も含ませず王太子は答えた。外を眺める横顔しか見えないが、もともと鋭い瞳が更に細められる。

「誓いの儀でどうこうしたいのならば、それまでは情勢を荒げたくないだろうと思うが……警戒しとくに越したことはないな」

影も頷く。

「鴉は近衛隊の監督を希望しています。出来れば指揮系統を鴉の下

に」

「掛け合ってみよう」

それから、と王太子は視線を影に向ける。

「”彼ら”に直接接触した感想は」

「おそらく大半は大したことありません。近衛でも上級隊士なら対応できます」

そこで一度言葉を切る。まだ青年と言っている、あの男……

「ただ一部は鴉でなければ手に負えないでしょう。更に限られた中には相性によれば鴉でも……苦しい、かと」

「お前にそこまで言わせるとはな。アノニマスだったか？」

「……彼と正面から対峙となれば、姫様を護衛しながらという状況は避けるべきと思いました」

感じたことをそのまま伝える。お役目のため、力が足りないことを嫌でも認めなければならぬ。

「……………」

王太子が机を指で叩く音が部屋を支配する。鷹の目が、ここではない何処か遠くを眺める。

「今日のお披露目だが、姫本人に立っていただくことにするか」

影は思わず主を凝視した。お披露目もだが、民衆の前に出るときは影が代行する手筈だった。

「姫も外に出た方が気分も晴れよう。相手も今日は動く可能性が高いとは言えないしな」

王太子は淡々と言葉を紡ぐ。

「夜の姫の護衛は続ける。だが誓いの儀の二日前までお前は好きに動け。影でも鴉としてでもなく、私の臣として」

それは、何かしらの成果を出してこいということ。

深海に意思の煌めきを宿し、影は一礼した。

「承知しました」

王太子が頷き視線を戻したとき、部屋にはもう王太子しか残っていないかった。

微睡む意識の中、名前を呼ばれた気がして影は意識を浮上させる。そこが慣れ親しんだ自室だと理解して壁から身を起こした。ゆっくり手で目を覆う。

……まただ。最近、名前を呼ばれる錯覚の回数が増えた。それは隙あれば自分と呼ぶ。懐かしいような、恐ろしいような……けれど何と呼ばれているのか、そもそも名を持たない自分を真実呼んでいるのか分からない。何故呼ばれたのが自分だと思っただろう。

深淵を漂う思考を中断する。習慣となった準備を手早く終わらせ外へと駆けた。

謁見の間では国王と王太子、そして鴉の一人と近衛隊長が話し合っていた。王太子が、国王に近衛の指揮権全てを鴉に委譲するよう提案したのだ。

これに異論を唱えたのは近衛隊長である。当然だろう。清廉潔白を信条に掲げる近衛隊は、暗殺業を主とし全容そのものが公開されていない鴉をよく思っていない。そんな鴉に指示されるなど隊士の誇りが許さない。命令を無視する隊士も出てくるだろう。と隊長は主張し、国王もそれでは難しいかと顔をしかめる。

そんな隊長に対して、何を思ったのか鴉が肩を揺らした。任務に私情を挟むとは、さすが近衛隊は気高くていらっしやる。

それは本当に小さな呟きだった。しかし大理石の部屋にはよく響いた。あからさまな挑発に隊長は顔を真っ赤に染めたが、掴みかかることはなく上座に向き直った。

「そこで提案なのですが、鴉の指示を私が受けて隊に伝えるというのは？私の指示として」

「それでは時間がかかるだろうが」

「しかし殿下、これなら隊に不満を与えず済みます。鴉の指示をより確実に遂行するなら」

王太子はこの提案に思いきり不機嫌な顔をしたが、国王はただ鴉に意見を問うた。鴉は隣の男を暫し眺めた後、了承の意を示した。

そうした裏がありつつもお披露目はつつがなく事を終えた。

レースをしていたが顔を出した巫女姫を観衆は熱狂的に迎えた。姫も疲れの色は残っていたが晴れやかな笑顔を見せた。横で穏やかに見守る王太子と二人並ぶ姿は、どんな名画よりも絵になっていた。

華々しい表舞台の一方、影は帝都中を走り回っていた。"彼ら"のものと思われるアジトを見つけ侵入した。"彼ら"以外のグルーブの人間は縛って情報を聞き出した。近衛隊のあの男に知られたら苦い顔をされるだろう。

城内も隈無く調べた。城には鴉が使う隠し通路があり、今ほど重宝したことはない。

そうして得た情報の中には興味深いものもあった。それでも決定打は掴めないまま、ミュレイヒエ側の段取り、曰く神儀も折り返しの日となった。今日は楔の洗礼を執り行う。帝国の人間には理解出来ないが、どうやらその洗礼をもって正式に帝国に『入った』ことになるらしい。

影は早朝から街で情報を集め、一旦城に戻った。その際料理人たちが使う勝手口を通りかかり……ふと、違和感を感じて視線を戻す。建物に隠れて周囲を注意深く見れば、すぐに違和感の正体は分かった。違うのだ、近衛の配置が。鴉が指示したものと。

目立つほどではないが、念のため報告しようと影は身を翻す。

楔の洗礼は厳かに行われた。聖都の神官が大勢並び、讃美歌が大気を震わす。帝都の教会も教皇まで総出で立ち合った。強烈な白、それでいて無個性な神官服を纏う人間が一人くらい列から外れても、特別気にする者はいなかった。

人のいない道を一人の神官服が歩く。ゆったりとした足取りで、今にも鼻歌を歌いかねないほどリラックスしている。歩調はそのまま、酷薄な笑みに歪んだ口が開いた。

「殺気をそれだけ当てといて無言はないでしょう。ここは近衛隊の警護が来ませんし……出てきたらどうです？」

「……近衛には、ここの巡回も指示してあるはずだ」神官服の青年……アノニマスは、突然現れた影に剣を突き立てられても笑みを崩さなかった。

「愚問ですね。私がこの場にこうしているのが何を意味するのか、分かっているでしょうに」

言われてすぐに思い浮かぶのは、勝手口で鴉の指示と違う配置の近衛たち。そして報告を受けた鴉の言葉。

他にも数カ所、配置を変えられています。出来た穴を掻い潜れば今日の神儀の間に紛れ込めますね。

そして、鴉の指示を変えられる人物は……

「ああでも」

青年が思い出したように声をあげた。

「牢獄塔を鴉が見張っているのには参りました。あの二人は親衛隊員ではないのですよ。手引きしたのは我々ですが……巫女姫様を敬う同志、一応助けてやろうと思いましたがね」

あの日、姫の部屋に侵入した賊からは大した情報を得られなかった。その理由は、”彼ら”ではないから。

しかしたえ口車にのせられただけの一般信者でも罪は罪で、またそれを知らない鴉が容赦するわけがなかった。鴉の拷問を受けた

二人は瀕死の状態。その二人を今、あつさりと笑顔で青年は見捨てたのだ。

だが影も聖人君子ではない。その事実には特段気につけず、目の前の青年に集中する。この青年は危険だ。この場で捕らえるか、最悪でも深手は負わせたい。

一方の青年は落ち着いている。そうですね、と暢気に呟いて手を口元に当てた。

「こちらとしてもあなたには興味があります。ですが神儀の最中に流血など御法度。そこです」

指を天井に向かって立てて、青年は言葉を続けた。

「いいことを教えましょう。誓いの儀で私は直接、巫女姫様に”御挨拶”します。何処よりも神々に近いところで」

止めに来い。言外に告げられ、影は目を細めた。畏だろうか。青年の意図を押し量りかねる。

「ではこの辺で失礼しますか。もう少し巫女姫様を見ていたかったですけど」

「……私から逃げ切れると？」

「ええ、そうですね？」

一拍置いて、風が起こる。すでに二つの白と黒はその場から消えていた。

青年を追って城外に出た影に、ナイフが襲いかかった。青年以外にも外に控えていたようだった。追跡は緩めず一つを小太刀で弾き落として手に拾う。懐にしまい、代わりに自分のナイフを飛ばし驚異の正確さで迎撃者たちを仕留める。

帝都の中ほどまで追ったところで、突如青年と影の間を色とりどりの風船が割って入った。下では子どもたちの喜ぶ声がする。帝都のあちこちで行われている大道芸だった。また視界が開けたときには青年を見失っていて、影は仕方なく城に戻った。主に報告することがあることが、唯一の救いだった。

神儀を終えて執務室に戻った王太子を待っていたのは影だった。

王太子は驚いた様子もなく席に着いて、目で報告を促す。

影はアノニマスの言葉をそのまま伝え、追跡中に手に入れたナイフがパレード時のものと同じだったこと、近衛隊の警備配置のこと、他の信者がどうやら”彼ら”に煽られていることを伝えた。多くの情報を見聞きして、巫女姫を暗殺する意味も推測した。

「どうやら信者にとって、巫女姫が帝国に嫁ぐことはその神格が失われることを意味するようです。俗世に降る、と」

「それでその神格が失われる前に殺してしまえと？極端だな」

「殺害を目論んでいるのは”彼ら”だけでした。聖都は今、土地が衰えてますから。失うならば巫女姫を供物にという算段では？……神聖を無くした巫女姫が耐え難いだけの可能性もありますが。他は事件を起こして帝国の面目を傷つけたいようです」

「どのみち巫女姫暗殺は確実か。こちらの想定通りだな」

皮肉げな笑みを口の端に型どって、王太子は頬杖をつく。

「それと近衛の件ですが……」

「ああ、小汚い鼠がうろついているな。牽制は必要だが、あまり大事にしたくない。泳がせておけ」

鼠……密告者、裏切り者。”彼ら”に通じる者が意図的に警備の配置を変えているのは間違いない。そしてそれが出来る人間は一人だけ。影の目蓋の裏に、近衛服に身を包んだ生真面目な男の顔が浮かんだ。

「承知しました」

報告を終えた影は姫の護衛に向かった。藍と橙の混じる黄昏の空では、半円の月が白く輝いていた。

神儀の間、夜の姫の護衛は影が全て担当した。そして毎夜王太子は姫の部屋を訪れた。まだ誓いの儀を果たしていない以上、王太子と姫は必要最低限の会話しか許されていない。影なりに気を遣って退出しようとするのだが、その度に止められて姿勢を正すのも毎夜のことだった。

王太子はただ黙って姫の横に座るだけ。静かに姫の寝顔を眺める王太子の雰囲気は穏やかだった。ただ日増しに複雑な色が瞳に宿るのを影は疑問に思った。

楔の洗礼以降、”彼ら”は不気味なほど沈黙を守っていた。

鴉は裏切り者、近衛隊長の男には牽制の意味で鴉の一人を隊長が率いる個隊に入隊させた。察したのか、その後の近衛の動きは鴉の指示に従っていた。それでも誓いの儀当日は保証できないことに違いはないが。

そして、神儀も最終となった夜。護衛についていた影は、突然現れた鴉に護衛の交代を知らされた。そのまま王太子の自室に行くよう指示され、戸惑いはあったがすぐに向かった。

影は王太子の部屋の扉をノックする。夜の廊下には昼以上によく響いた。誰何の声に答えてから扉を開けて部屋に入る。任を解かれて呼ばれた動揺を感じさせない滑らかさで膝をついて言葉を待った。「突然呼び出した用件だが……誓いの儀の前夜、お前の任務は全て解く」

「全て、ですか」

「何、お前を信頼していないわけではない。父上が発案者だが、最後にゆつくり過ごさせてやりたいとのことだ」

……最後。影の最大にして本当のお役目である、誓いの儀での影

武者役。

影は目蓋をぎりぎりまで下ろし、少しの間床を見つめる。それからしっかりと頭を下げた。

「勿体ないお氣遣い、ありがとうございます」

立ち上がり、もう一度頭を下げる。そして退室しようとした影の目に空っぽの花瓶が留まった。空ということ以上に装飾を嫌う王子の部屋には似つかわしくなく、影は動きを止めて見つめてしまった。「ああ……」影の視線の先を追った王太子は、お前は本当に夜目がきくなと笑った。

「……申し訳ありません。では私はこれで失礼します」
「気になるか？」

すぐさま身を翻そうとした影は、その問いかけにゆっくりと主へ向き直った。詮索すべきではないと思っていたから、主が問うた真意を量りかねた。

振り返れば背後に白金の月を従え、こちらを真っ直ぐに見つめる鷹の目と目が合った。

その姿を見て、この御方は本当に生まれながらの王なのだと改めて実感する。ほとんど無意識に膝をつき、頭を垂れる。主の真意は分からない。でも主が会話を許しているなら知りたいと思う。慎重に口を開く。

「失礼ながら、殿下にしては珍しい、と。……花をお生けには？」

一時、沈黙が二人の間に落ちる。影は頭を下げていたから、主がどんな表情だったか見えなかった。しばらくして、空気が動いた。椅子が軋む音で主が花瓶に近いソファに腰かけたのだと察する。

「一輪……昔な。確かに美しく咲いていて、ただの切り花のくせにそれは見事だった」

だが、と王太子は自嘲気味な吐息をもらす。

「花が落ちてしまったんだ。やけにあっけなかったな」

そう呟く王太子の声はひどく平淡なものだった。影は話の行き着く先が分らず、ただ黙って耳を傾けるしかなかった。

「この花瓶に生ける花は1つだけだと決めている。それがない今、この花瓶にはさして意味はないのかもな。その花はもう二度と私の手に戻ってこないのだから」

「……殿下が手に入れないものなど私には想像できませんが」「そんなことはない。本当に欲しいものは、ただの一つだって掴めなかった」

肩を揺らして王太子は答えた。無力な己に対する侮蔑と僅かな苦しい思いが、影にも伝わってくる。王太子は手を目線の高さに掲げた。「私には、何も無い。鷹の王子と言われても獅子王たる父上に遥かに劣る。自分の無力さには嫌になるな」

「そんなことはありません。私はずっと見ておりました。殿下は誰よりも王たるに相応しい御方です」

影は勢いよく顔をあげて、珍しく饒舌になる。語る言葉にも熱が入った。代わりに王太子の声はより一層冷えていく。

「それが幻想だと、私がお前にそう思わせているだけだと何故思わない。私がお前から何を奪ったのか、忘れたのか。本当は恨んでいるだろう？」

「……殿下からは、多くのものを頂きました。感謝しております」

本来なら与えられるはずもないのに、個室が用意された。

整形のとき、瞳の色だけはそのまま残された。お前の色だと主に言ってもらった色。

いくらでも治療できるのに、影の顔が傷つくことを禁じられた。

唯一の王太子直属の臣下という、これ以上ない身分を授けられた。姫と同等の教養をと、貴族が受けるような教育も受けさせてもらえた。

それら全てが主の指示だと知っていた。

他にも多くの……身に余る幸せを頂戴してきた。最高の誉れであるお役目をもらった。優しい姫と穏やかに笑い合う主を見ることも

できた。十分だった。満たされていたはずだ。これ以上何を望むというのだろう。恨むわけがない。

「そして、殿下はこの帝国を統べる御方です。全ては殿下の手に」
真摯に答える影をじつと王太子は見つめる。影は濃く襲ってくる畏敬の念に視線を逸らしそうになるが、耐えて次の言葉を待った。
鷹の目と称される、世界を見渡す瞳は数瞬だけ虚空を漂い、再び焦点が定まったときには強い光を灯していた。

「……そうだな」

くっ、と口角を上げて笑い、王太子は立ち上がる。

「そうだったな。失ったなら、また捕らえればいいだけの話だ」

……そして二度と逃れられないよう、鎖で縛って、閉じ込めるのもいい。

王太子は一心に自分を見つめる影の前まで寄ると、徐にしゃがんで視線を合わせた。影はただ主を見つめ、次の言葉に耳をすます。相変わらずその瞳は凧いだままで、迷いも疑いも、何一つない。それを満足げに確認した王太子は”その名”を呼んだ。

「ダリア」

影は最初、何と言われたのか分からなかった。

「……ダリア」

主が肩をつかみ無理矢理立たせた時も、せいぜいあの花瓶に生ける花を自分に命じているのだろうかと思わなかった。

「私の……俺だけの、ダリア」

主の瞳の奥で昏い炎が揺らめくを認めて、漸くその名がかつての自分の名であったことに思い当たった。

そしてそれを理解するよりも前に、熱く柔らかな感触に口を塞が

れたのを感じた。それは鳥が戯れるように二度三度と唇を啄む。

「ダリア……」

窺い知れない感情が籠められたその名前を聞きながら、己の首に顔を埋めてくる主を、熱い吐息を、影……ダリアは呆然と受け止めていた。

月の光が静かに部屋へ入り込む。強く己を抱き締める腕が緩んでも、ダリアは王太子の顔から視線を逸らせなかった。たった今自分の身に起こったことを処理しきれない。

幼子のような無防備さで見つめてくるダリアに対して、王太子は両頬を包み込んで真っ直ぐ視線を返した。深海の奥に自分だけが映っていることを再確認する。そして最後にもう一度、ゆっくりと唇を重ねた。それが離れると、王太子は背を向けてソファに身を預ける。

「護衛は別の鴉に任せてある。今日はもう部屋へ帰れ。あと二日だ、気を抜くな」

それは先ほどとは違い、耳に馴染んだ厳しい主の声だった。

ダリアは一度だけ目を閉じ、次に目を開けたときには完全に忠実な影と戻っていた。深く礼をし、今度こそ部屋を出る。

部屋に戻った影は、いつものように武具の整備を始めた。ひたすら機械的に正確に、武具の一つ一つを確かめていく。その手に淀みはなく、いつもと全く変わらない時間で作業を終える。新しい黒装束に替えて、結い上げている髪を下ろす。その時ほつれ一つないはずの髪がやや乱れているのを知って、指先が震えた。しかしそれも一瞬のことで、水を張った桶と櫛で手早く髪を整えて全て済ませた。小太刀を抱え、定位置の床に座り込む。相変わらず物音をほとんど立てず、そのまま浅い眠りについた。

そうして夜は更け、朝を迎える。
誓いの儀は明日に迫っていた。

鴉はぎりぎりまでより正確な情報を集めた。それらを合わせて”彼ら”のアジト、隊員全てを割り出していく。

影は姫の護衛をして一日を過ごした。

そして瞬く間に時間は過ぎていく。姫は一日中落ち着かなかった。いつもの笑顔が消え失せ、影と目が合うとすぐに瞳を伏せる。月が一番高い位置で輝くとき、ついに影は姫の護衛を別の鴉に任せ、護衛任務を終えた。結局今日は一言も話さないままだった。挨拶も出来なかったが、仕方ないと納得する。

影は薔薇園を通って部屋に帰ることにした。最後にあの美しい薔薇たちを見たかった。誰もいない薔薇園に足を踏み入れる。入り口で鴉の一人と行き合った。それは師だった人だと分かったが、お互い会釈も何もしないですれ違う。

「……私はとても惜しいと思っていますですよ」

不意にかけられた言葉に、影は足を止めて振り返った。鴉は近く
の薔薇を見下ろしたまま言葉を続ける。

「貴女は鴉としても王太子の臣としても、これ以上ない逸材です。
貴女ほど殿下に忠誠を捧げた者はいないでしょう」

もちろん私も忠誠を誓いましたけどね。小さく笑うその人を見て、
影は不思議な気分だった。この人にも感情があるのかと、当たり前
のことを意外に思う。

「だからこそ、貴女を憐れに思います。貴女は揺らがない、迷わな
い、疑問すら抱かない。それは貴女的美徳であり優秀さを示す最た
るものです。けれど」

そこでいきなり言葉を切って、軽く頭を振る。

「……いいえ、忘れてください。もう貴女の運命は変えられない。今、私が貴女に望むのはただ一つ。……どうぞ、そのまま。心のまにお役目を果たしなさい」

その言葉を最後に、鴉は闇に溶けていった。一瞬目が合った気もしたが定かではない。最後の師事を胸に、影は誰もいない闇に一礼してからその場を去った。

部屋に帰れば習慣化している武具の整備を始める。明日は巫女姫として立つわけだから本当に最低限、仕込み針一本で十分だった。けれどいつものように武具の一つ一つを手にとってきれいにしてやる。むしろいつも以上に念入りに行った。

明日忍ばせる仕込み針用に調合した猛毒を針に塗り込み、薄膜で慎重に針全体を覆う。光を反射せず、人間の血液に反応して溶ける特殊な膜である。

最後に愛用の小太刀を手にとる。刀身に自身を映すと、深い青がこちらを覗き込んでいた。それと目が合うと、脳髄にあの声が響いた。いつも自分と呼ぶ、謎の声……二日前から一層近く聞こえてくる。もう、隣で話しかけてくるようだった。額に手をやる。頭が割れると思った。誰。一体、誰が……

…ダリア。もしお前が望むなら、私は

強くつむっていた目を大きく開く。細く鋭く息を吸い込んだ。

……ああ。思わずその場にしゃがみこみたくなる。何故、忘れていたのだろう。……何故、思い出してしまったのだろう。

遠い記憶が蘇る。自分よりも少し薄い青の瞳を持つ壮年の男。かつて父と呼び敬愛していたその人。何時だって厳しく、でも何時だ

って自分を見守ってくれた。

そう、あの時も。あの人は言ってくれた。たとえ気の迷いだとしても、彼にとつての至高の主を裏切ってまで手を伸ばそうとしてくれていた。

自分は何て愚かなのだろう。父も、師も、姫も。心に向けてくれた周りになど見向きもしなかった。ただ王太子だけを見ていた。自分の世界には王太子しかいなかった。

それで、それだけでよかった。

思考を中断して忘れたはずの感情が芽生えるのを押し殺し、束の間の休息をとる。夜明けはすぐそこだった。

高らかにラッパ音が鳴り響く。朝から帝都は色とりどりの紙吹雪が舞い、人々の目を楽しませた。世界中が注目する誓いの儀が始まるうとしていた。

侍女たちが訪れるよりも早く、巫女姫本人は鴉による厳重な警護のもと、誰も近寄らせないようにしてある安全な部屋に避難した。

影は代わりに巫女姫として侍女を出迎え、儀式の支度を進めていく。影の振る舞いは完璧で、侍女たちすら疑わなかった。

墨色の髪を複雑に編み込み、結っていく。さすがに化粧の時は目を閉じて深海の瞳を隠した。黒装束とは正反対のきらびやかな、上質なドレスを身につける。繊細な刺繍が施されたそれは柔らかく光沢を放って美しかった。最後に宝飾で飾り立てれば、まさしく彼の女神を思わせる花嫁姿の巫女姫がそこにいた。

侍女たちは感嘆のため息をついたり、中には感極まって泣く者も

いた。誰もが花嫁に向かって印を切って頭を垂れ、聖句を呟く。

そんな中、近衛隊士を従えて正装した王太子が迎えに来た。王太子は花嫁を眺めてから無言で手を取って部屋を出る。照れ隠しだと侍女たちが微笑ましく思いながら送り出した。

誓いの儀は所詮形式的なものである。しかし対外的にも伝統的にも、この儀式を以て正式な夫婦となったことを示す大事な儀式だ。各国から賓客を招き、お披露目のときよりも大々的に行われる。

しかし何と言っても一番の見せ場は、聖塔の上で交わされる誓いの口づけだろう。教会よりも高い建物が禁じられているので、塔の上とは言っても民衆の位置からでも様子がよく見える。ほとんどの者は国王や賓客の口上を聞きながら、その瞬間だけを今か今かと待ちわびていた。

……そして、影も。影だけではない。鴉も”彼ら”も。息を潜め、その時を静かに待っていた。

空を突き抜けるファンファールが、一際大きく鳴り響いた。ざわついでいた場に完全な静寂が訪れる。花婿花嫁が腕を組んで塔の階段を登る。誰一人として言葉を発さず、固唾を呑んで見守っていた。そして最上部に到達し、二人が向き合う。まず王太子が誓いの詞を唱えた。次いで、影が誓いの詞を唱えるために口を開き……

聞こえた音が何か判別する前に、影はほとんど反射で王太子の肩を押した。王太子がたたらを踏んで二三歩離れたとき、二人の間に白い塊が落ちてきた。その塊の中から硬質な光が伸びて、影の胸に沈んだ。

それは劇的で、それでいてひどくあっけなかった。

何か、分厚いものを突き抜ける鈍い音を聞いた。

押し出されたように空気の塊を吐き出す。血の混じったそれはこぼりと喉の奥で鳴った。

一拍遅れて悲鳴をあげる民衆。

怒声をあげる近衛隊士。

鴉たちは親衛隊の一斉検拳を始めた。

影の耳はそれら全てを余さず拾った。ただ、近くにいるはずの王太子からだけは何の音も聞こえなかった。

目の前で狂った愛情に顔を歪める青年を見つめる。巫女姫への盲信が、その瞳と思考を曇らせていた。

静かに、あまりにも自然に。影は猛毒の針を青年の喉に埋めてやった。その何気なさ、青年は何をされたかすぐには分からなかったようだ。首を傾げて喉元に手をやり、それからやっと思いの表情でこちらを見上げる。

影はいえは刺されているとは思えないほど落ち着いた眼差しで見返した。その凜いだ瞳を、何よりも深い青を見て気づいたのだろう。震える口が何かを言おうと開かれるが、そのまま何も言えずに青年は絶命した。こちらに崩れ落ちてきたが、影は王太子に腕を引かれ寸でところで避けた。鷹の目が細められ、片頬だけがひきつるような笑みで歪められる。

「貴様になど、どちらの巫女姫だつてくれてやらん」

影は、もうほとんど見えていなかった。視界が黒くぼやけていく。先ほどまであんなに煩かった様々な音も全く届かない。静かだった胸の痛みは増していくが、気にならなかった。今までで一番、心が

安らぐのを感じた。そのまま逆らわず、慣れ親しんだ闇に自らの全てを委ねた。

純白の花嫁衣装が赤く染まっていく。青い瞳は固く閉ざされていた。王太子は温度を無くした指先を温めるように手を握り、どこか穏やかな表情を浮かべる従者をずっと眺めていた。

下で見ていた者たちは、あの時の二人ほど神聖で美しいものはなかったと言う。その後も王太子夫婦は並べば絵になると評されたが、どの絵師も当時の二人の姿を最も描きたがった。けれど王太子が描くことを禁じたので、この世に深海の青を宿す巫女姫と王太子が寄り添う姿は一枚も残らなかった。

殺害を企てた親衛隊は鴉によって一人残らず捕まった。巫女姫の亡骸は聖都の楔の泉に安置されたとのことだった。巫女姫の死は世界中が見ていた。誰もがこの世の終わりのように嘆いた。しかし衝撃的な事件の二日後、更に驚かせる事態が起こった。

帝国が、誓いの儀のやり直しを発表したのだ。

どうということなのかと、再び帝国に入りきらないほどの人が押し寄せた。世界中が注目する中、王太子と手を取り合って現れたのは亡くなられたはずの巫女姫だった。顔色は化粧でも誤魔化せないほど悪かったが、それでも生きてそこに立っていた。聖都の女王陛下が前に進み出る。

事件当日の夜、姫を眠らせた楔の泉から眩い光が溢れ、自分は女神の声を聞いた。そして光の中から傷一つ無い姫が出てきたのだ。

これは、女神の奇跡。神々からの祝福である。此度の結婚、全ては女神の御心なり。そう、猊下は高らかに締めくくった。

静寂が降り、聴衆が呆けていたのはほんの僅かで、すぐに大歓声が帝国を包み込んだ。世界中が歓喜した。女神様は、やはり私たちを見守ってくださっていた。なんて素晴らしいことだろう。歴史上唯一の神々の祝福を受けた誓いが成されたのだ。

反対派の信者たちも誰もが、認めざるを得なかった。この結婚を歓迎した。その日は至るところで鷹の王子と奇跡の巫女姫のために祝杯が挙げられた。

そして聖都と帝国が手を結び、世界は統一への大きな一歩を進んだ。獅子王と鷹の王子は平和の為に尽力し、よく治めた。世界はより多くの幸福に満たされることとなった。

全ては事実であり、神々が起こした奇跡の結婚話はこれで終わる。

獅子王が帝国を治めていたころ。帝国がその栄華を極めたころ。ある一人の、名を持たない少女が死んだ。その少女は存在しない人間だった。存在を許されない人間だった。少女に関する全ては残っていない。

彼女の死後、一握りの者たちだけでひっそりと、彼女は誰も来ない森の奥に埋葬された。名を刻まれることもないし墓標もない。ただ、王家が所有する森には深紅のダリアが一輪だけ咲いている場所がある。

王太子と巫女姫は、その生涯を終えるまで仲睦まじく暮らした。

王太子、その時には国王陛下の死後、空の花瓶1つだけが王妃の手によって棺に入れられた。王妃はその後半年ほど生きてから安らかに眠りにつく。そして世代は変わりどれほど世が移ろうとも、森には一本の赤いダリアが変わらず咲き続ける場所があった。その場所の意味も、花に籠められた想いも今は誰も知らない。華やかなダリアはしかし、ひっそりとその花弁を広げ咲き誇る。それは、栄華を極めた帝国が滅ぶその時までずっと変わらない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8533p/>

或る物語

2011年8月16日23時10分発行